

東書教育賞は教育現場を 支援します



代表取締役社長

川畑慈範

おはようございます。東京書籍の川畑でございます。主催者を代表いたしまして、一言お祝いのご挨拶を申し上げます。

第29回東書教育賞を受賞された先生方、誠にありがとうございます。心よりお祝い申し上げます。本日は公私ともご多忙の中、休日にもかかわらず、ご遠方より贈呈式にご出席いただき、厚く御礼申し上げます。

昨年は、年初から年末まで政治主導の「教育改革」が次々と打ち出された一年でございました。思いつくまま挙げてみますと、高校無償化の所得制限の導入、幼児教育の無償化、教育委員会制度改革、土曜授業の導入、道徳の教科化、小学校英語の教科化、さらには、大学入試改革、教科書制度改革、等々であります。

元旦の朝日新聞が、これらの教育改革を取り上げた特集記事を掲載しておりました。それによりますと、これらの改革は明治の改革、戦後の改革に続く、1971年（昭和46年）のいわゆる「46答申」や1984年（昭和59年）の臨教審の「第3の改革」の議論の繰り返しが目立つとしています。

教育改革は、故障した自動車を走りながら修理するような難しさがあると言われた方がいますが、現場と離れたところで教育改革が議論されている間も、現場では、休むことなく教育が行われており、多くの先生方が懸命に努力され、格闘しておられます。このことを一人でも多く

の方に知っていただきたい、光を当てたいということが、東書教育賞を創設した理由の一つでございました。

さて本教育賞は1985年（昭和60年）に始まって、今回で29回を数えます。この間に受賞された先生の数は延べ370人以上に及びます。ご応募いただいた論文の数は、6千点を優に超えております。30回の節目を迎える前に、私なりに29年間の教育賞の歴史を振り返ってみました。

1985年にスタートしたときは、小学校部門と中学校部門の2部門でしたが、第10回からは小中とも実践論文部門と教育用コンピュータソフト活用部門に分け、その後第17回から教育用コンピュータソフト活用部門は、情報通信メディア活用部門に、さらに第22回からはICT活用部門と名称を変更し、第25回からはこの部門を廃止し、実践論文との統合を図りました。これは、我が国の教育におけるICT教育の位置づけと役割の変遷を反映したものと言えます。

また、入選論文の内容にも時代の変化が映し出されています。第1回から第15回くらいまでは、小学校、中学校とも国語、社会、算数など教科の実践論文がほぼ90%以上を占めていました。また、平成4年以降は、生活科が登場し、平成12年頃からは「総合的な学習」が急激に増加しています。因みに、「総合的な学習」が完全実施されたのは、2002年（平成14年）ですが、平成13年度の第17回の入選論文22編中7編が

「総合的な学習」でした。

さらに、2002年に小中学校設置基準が定められ、「学校の自己点検・評価の実施」が努力規定に盛り込まれ、2009年（平成21年）には、学校教育法が改正され、学校評価に関する根拠となる規定や学校の積極的な情報提供の規定が新設されるなど、学校評価がクローズアップされました。この時期から、学校経営や学級経営に関する実践論文が増えてきました。そのほか、特別支援教育や食育、キャリア教育、健康教育など、入選論文からその時代の教育の動きを推し量ることができます。このように、東書教育賞は、この30年間の我が国の教育の変化を投影するスクリーン、時代を映す鏡であると言えるのではないかと考えております。

弊社は、毎回、受賞された先生方のご実践の記録を論文集としてまとめ、学校や教育委員会など教育関係機関にお届けしてまいりました。先ほど申し上げましたように、現場で日々努力しておられる先生方のことを広く知っていただ

きたい、先生方のご実践を多くの先生方にご覧いただくことによって、授業改善に取り組んでおられる先生方、とりわけ若い先生方のお役に立てていただきたい、さらには、是非受賞された先生方の探究心を学んでいただきたいの思いからでございます。今回も論文集を作成する予定でございます。

最後になりましたが、公私ともご多忙中、最終審査をご担当いただきました審査員の先生方、一次審査をご担当いただきました東京教育研究所主任研究員の先生方はじめ多くの先生方に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

また、本日ご出席いただきました報道関係者の皆様方に感謝申し上げて、簡単ではございますが、ご挨拶とさせていただきます。

改めて受賞された先生方、本日は誠にありがとうございます。今後のますますのご活躍を心よりお祈り申し上げて、お祝いの言葉とさせていただきます。



本日、表彰を受けられます先生方、おめでとうでございます。学年末も遠くないこの時期に、何かとお忙しいとは存じますが、そのさなかに受賞という榮譽を手になされたこととお祝いいたします。

ところで、皆様方の努力もさることながら、今日の贈呈式に至るまでには実に多くの方々の協力がございました。論文を募集された東京書籍株式会社の皆さん、それから応募された全編の論文の中から、審査可能な編数にまで絞り込

んでくださった東京教育研究所主任研究員の先生方や教科書編集委員の先生方、これらのすべての方々のエネルギーと見識に深く敬意を払いたいと存じます。

「東書教育賞」は募集が始まってから実に29年という歳月が流れました。この間応募された先生方の数は増え続けてきました。教育実践を絶えず文章に刻み、実践論文として応募されました全国各地の先生方に深く感謝し、敬意を払いたいと思います。

さて、受賞された皆さんの論文について要旨を紹介し、かつ、審査委員会の講評を簡単にご紹介します。

まず、小学校の部、最優秀賞を受賞されましたのは、**宮城県石巻市立雄勝小学校の徳水博志先生**の論文です。徳水先生が勤務されます雄勝小学校は雄勝湾の最も奥の部分にあり、東日本大震災で多くの犠牲者を出した大川小学校とは山を隔てて隣接しています。津波で校舎は全壊しましたが、子どもたちは高台に避難して無事だったそうです。

しかし、子どもたちの心の中には大きな苦しみがありました。この実践は、その子どもたちの苦悩やストレスに対する心のケアを求めたものです。徳水先生はその苦悩やストレスを、一つには「震災が与えた直接的な喪失感や心の傷である」というように捉えていらっしゃいますが、これに加えて「急激な生活環境の変化によるストレス」が深刻に複合していると説明しておられます。

もちろん、こうした捉え方が特にオリジナルなものだというわけではありません。しかし、審査委員の私どもが心を打たれたのは、徳水先生や同僚の先生方が、こうした悩みやストレスを文字どおり子どもたちにしっかりと寄り添って受け止めていらっしゃることに、しかもその対応は実に多様で工夫に富んだものであったということです。

俳句や作文、朗読劇、ジオラマや版画の制作など、それらを通じて子どもたちが震災体験を

語り、吐き出し、表現することで現実を受け入れ、前を向こうとする意志を育てることに、ただ筆者だけではなく、学校全体の強い使命感が伺われました。優れた論文だと思います。

次に小学校の部、優秀賞を受賞されましたのは、**愛知県碧南市立大浜小学校の長田洋一先生**の論文です。先生の論文の表題は「広汎性発達障害児の言語発達を促進させるコンピュータ教育」というものです。題名の一部になっております広汎性発達障害といいますのは、PDDと略され、英語ではPervasive Developmental Disordersというそうです。社会性やコミュニケーション能力の獲得といった、人間の基本的な機能の発達遅滞を特徴とする発達障害の一つの領域と言われています。

発達障害の理解自体が十分ではない現況において、コンピュータを有効に活用する課題は、特別支援教育を推進する上で大切であると筆者は述べています。後で、ICT部門の赤堀先生から講評があると思いますが、この論文は、「トーキングカード」の活用、「ロールプレイ」を用いて発達障害児の言語発達を促進するという方法に支えられた優れた論文です。

もう一人の優秀賞は、**宮城県仙台市教育委員会の小原貴之先生**の論文です。「絵図をかく活動から、数学的思考力を育てる」と題されました。1学年の算数の授業には、ブロックやおはじきを使った操作活動だけの授業が多く見られます。教科書にも、計算場面でブロックの挿絵があるのは当然と思われています。

しかし、ブロックのみではノートに何も残りません。筆者はブロック操作による表現活動には反対はしていませんが、ブロック操作だけが表現活動であるという考えには反対しています。

そこでブロックに置き換えてノートに絵や図をかく表現活動を取り入れ、加減計算の理解を図り、思考力を育てる実践を行いました。小学校の入門期において、絵図をかくということのよさを実感できる優れた論文でした。

もうお一人の優秀賞は、**福島県新地町立福田**

小学校の高橋尚幸先生の論文です。「学習レポートと3つの場で作る『つながる国語科』」という表題です。

筆者が勤務されます新地町立福田小学校は、福島県浜通りの最も北の部分にあり、全校生徒100名ほどの小学校です。東日本大震災では大きな被害を受けましたが、「被災地の僻地校に勤務する教師には、復興を支える人材を育てる責任がある」という信念の下、筆者は国語科を中心として子どもの思考力、判断力、表現力の育成に取り組んでおられます。

子どもたちは繰り返し学習レポートを書く中で、資料を調べる力、図や表を用いて説明する力、友達に問う力などを伸ばしていきます。教科を横断し、レポートという一つの言語活動の書き方を活用しながら子どもが力をつけていく取り組みは興味深く、大変優れた論文です。

小学校の部、特別賞には、**愛知県碧南市立榎尾小学校の金子てる子先生**の論文が選ばれました。東日本大震災を契機にして、学校生活の中で何ができるかということを見直し、持続可能な復興教育を実践されました。

まず震災発生の直後からその取り組みを開始し、次に以前から行っておられる米づくりと芋の栽培を生かし、子どもたちの手による支援活動を中心に実践されました。また、これらの活動を教育課程にしっかりと位置づけ、持続的な教育活動にしているという点で大変優れた論文であると判断いたしました。

なお、金子先生は、第17回と26回におきまして優秀賞を受賞していらっしゃいます。

では、中学校部門に移ります。最優秀賞を受賞されましたのは**岩手大学教育学部附属中学校の佐藤寿仁先生**の論文です。佐藤先生の研究は、生徒の学びを結果だけで評価するのではなく、学びの思考やプロセスを大切にいらっしゃるものです。

課題自体が大変よく取り上げられており、扱い方もいくつもの先行研究があり、丁寧な授業展開で多くの生徒の反応を引き出し、それを生

徒に自覚化させることで学習の質を高めています。つまり多くの先行研究にひたすら従うのではなく、それを適宜、批判的に位置づけながら、生徒たちの学びの自覚化を促しているということです。

近ごろは、大学ですら学生たちの主体的学習が課題となっている時代で、「学習の主体化」ということがよく言われるようになってまいりました。生徒の思考を深め、学びが次の学習への効力を持たせることになるということを実践したこの論文の意義は、大変大きいと考えられます。

中学校の部、優秀賞を受賞されましたのは、**千葉県南房総市教育委員会の鈴木康代先生**の論文です。「中二理科で、説明活動の改善を図り、深く思考する生徒を育てる」というのが、この論文のテーマです。中学校第2学年の理科で、4時限にわたり他者に説明する言語活動を取り入れて、思考力の育成を目指した実践を論文にまとめられたものです。

PISAの2009年度の調査結果、あるいは平成24年度の全国学力・学習状況調査結果と、目の前の生徒の実態から研究課題を明らかにして、学習指導要領の改善事項の一つである「言語活動の充実」を目指して取り組まれた優れた論文です。

なお、鈴木先生は第28回におきまして最優秀賞を受賞していらっしゃいます。

もう一人の優秀賞は**佐賀大学文化教育学部附属中学校の横山千晴先生**の論文です。「パフォーマンス課題とルーブリックで発信力を問う英語授業」という表題です。本論文は東京書籍の教科書『NEW HORIZON』の1年生の「Speaking Plus道案内、留学生に佐賀大学周辺マップを作って紹介しよう」という単元構想、帯活動、ルーブリックの作成、使用の実際、そしてそれらを振り返っての有効性と課題について研究実践されたものです。

生徒とともに開発されたルーブリックは大変素晴らしく、また評価についても、自分が評価

するクラスメートを振り当てるというやり方が工夫されており、非常に大きな工夫点だと思います。

ループリック、帯活動等については、いま学校の中に広がっていった、いわば教授改善の小道具とも言われるものですが、それらが縦横に使われています。教師が用意するマップによって、既習事項を確実に定着させることができ、生徒が自立した学習者に成長することができる大変優れた論文です。

中学校の部、特別賞は埼玉県越谷市教育センターの大西久雄先生の論文が選ばれました。「ICTで学校が変わる～これからの社会に対応する力の育成～」という表題です。後で赤堀先生から講評があると思いますが、簡単に申し上げますと、これはICTを糸口として、外部の力を校内に取り込んで学校を大きく変えていったという点で、大変優れた学校経営の論文であったと思います。

さて、今回は東北から5名という多くの受賞者が出ました。それも東日本大震災で大きな被害を受けた岩手、宮城、福島の3県から出ています。第25回から5回分を振り返ってみますと、この3県の応募編数と受賞者数は、第25回は20編、そして受賞者数は1名、第26回は14編で1名、震災があった第27回は14編で1名、第28回は28編で2名、今回第29回は25編で5名となっています。

この数字が物語っているものには、非常に興味深いものがあります。私は長年この「教育賞」の審査委員をしておりますが、東北の受賞者はたいてい1名ないし2名だったと思いますが、今回は5名という大量の受賞者を出すことができました。これこそ3県の先生方の復興に対する熱い思い、人材育成こそが復興の要だとされる教育実践の結晶ではないかと思います。

現実としては、東北3県の復興はまだまだ厳しいものがありますが、先生方の熱意が復興実現の力になることを心から願っております。

最後に、審査委員会の座長として、次の二つのことを申し上げたいと思います。

一つは、2011年3月11日の東日本大震災に関することですが、東北地区の先生方からの応募はその後いったん激減いたしました。後に完全に回復いたしました。私ども中央教育研究所も支援事業の一つとして講師派遣や講演活動を行うことで、できる限りの力を注いでおります。東北地方における教育を通じての支援活動との関係から見ても非常に嬉しいことで、特に今回の5名という受賞者数は、非常に感慨深いものがあります。

また、当研究所としても今後も支援活動を継続していきたいと思っています。

二つ目は、これまでも何回かこの表彰式で申しましたが、教育実践を文章にするという教育文化の素晴らしさについて触れておきたいと思っています。教育実践や授業実践のプロセスを書くという行動は、日本独自の教育文化の一つではないかと思っています。

私は教育の歴史を専攻していますが、その伝統は実に古い時期から流れてまいりました。20世紀に入った頃から、今ある教育雑誌の先祖にあたるような教育雑誌が続々と創刊されました。その編集者のほとんどは教職経験を経たジャーナリストたちで、また読者は現職の教師、義務教育学校の教員でした。学校の先生方が最大の読者だったわけです。

その教育雑誌の中身を支えたのは、先生たちの投稿でした。「何年生、地理学科、第何限目の授業を私はこうやった」というようなことが、大変詳しく書かれて掲載されていきました。つまり日本では20世紀に入るぐらいから、実践の結果を記録するといった教育文化が、現職の先生たちによって担われていたこととなります。

その流れは大正時代になると、子どもの文学的作文の指導記録が掲載されるようになり、昭和の時代になると観察記録であったり、さらには生活の指導雑誌等々が発行されたりしました。そうしたことから考えてみても、この教育

賞に応募された先生方は、まさにその日本の伝統文化の先端に立っていらっしゃるわけです。

日本教育史の中の最も貴重な遺産として、今後さらにこの流れを発展させていかなければな

らないと思います。どうか先生方の手で、後輩の先生方にも力強く伝えていってくださるようお願いいたします。

本日は、本当におめでとうございます。



受賞された皆さん、おめでとうございます。私のほうからは、ICT部門の審査内容を簡単にご説明させていただきます。

今年の審査で感じたことは、今年はICTに特化したといえますか、特徴がよく表れている論文が多かった気がいたします。今年のICTに関わる論文では、小学校で優秀賞、中学校では特別賞の受賞となりました。

小学校の部、優秀賞を受賞されましたのは、愛知県碧南市立大浜小学校の長田洋一先生の論文です。「広汎性発達障害児の言語発達を促進させるコンピュータ教育」というテーマです。

文部科学省の調査によれば、発達障害の可能性のある小中学生が6.5%に上るといわれています。6.5%ということは、40人学級で1クラスにつき2～3名の割合になります。

私は大学で教員養成系の学部におりますので、学生たちが教育実習に行ったときに、発達障害の子どもたちのケアをどうするかということが大きな課題の一つと考えております。

先般、ある発達障害系の専門家の話を聞いた

ところ、例えばひらがなの「あ」を見たときに、発達障害の子どもはどうやって認識するのかということで、そもそも認識そのものが異なっているというのです。

私たちは「あ」といえば、はじめ横に棒を書いて、次にもう一本棒を上から交差するわけですが、発達障害の子どもはそう認識していないのだというのです。専門家に聞くと、交差という点の概念を認識していないというのです。

そう考えると、紙に書いて文字を見せるだけでは理解が困難であるということなのです。そうになると、どうしてもアニメーションや動画を使って書き順がきちんとできるものがないと頭に入ってこないのだという話を聞いたことがあります。私は「なるほど、そうだな」と思いました。つまり障害のある子どもにとっては、デジタルという道具がなければ、紙という平面に書かれたものだけでは、理解できないというわけです。

総務省関連のある研究会において、ここにいらっしゃる東原先生もご出席いただいたのです

が、私が司会をしましてシンポジウムを行いました。そのときに非常に興味深いお話を聞きました。何が興味深いかと言いますと、通常の紙を使って子どもたちが勉強してテストをすると、30点とか40点ぐらいであったものが、何も教えないでデジタル教科書を渡して（デジタル教科書はご存じのとおりクリックすれば音声も動画も出ます）テストを行ったところ、30点の子どもは60点に、40点の子どもは80点になった、得点がほぼ倍になったという報告を聞いたときに、私はびっくりしました。

私は、子どもたちの特性に応じて、デジタルというものの特性を生かすことは教育に携わる者の責務ではないかと思えます。デジタルというのはたぶんそういうものなのだろうと思うのです。クラスに2～3人の割合とされる発達障害の子どもを、どのように1人の先生が指導するかということです。いま学校では、チーム・ティーチングなどいろいろな方法もありますが、その中でデジタルという道具が果たす役割は非常に大きなものがあると思うのです。

そうした中で長田先生は「トーキングカード」、カードに例えば果物や飲み物などいろいろな絵が書いてあり、それをどう発音するか、「トーキングカード」のプレイヤーから音声が出てくるという環境をつくり、子どもたちは繰り返し繰り返しそれを学習することで身につけていっています。

ともすると発達障害というのは、いわゆる先ほど言ったLD (Learning Disabilities) のような学習障害だけではなく、ADHD (Attention Deficit Hyperactivity Disorder)、つまり注意欠陥・多動性障害があります。

例えば私がある先生に聞きましたら、バスやトラックが大好きな子どもはトラックが来たと言って、そこから離れなくなってしまう、長田先生の論文の中にも書かれていましたが、てんとう虫がいたというので、チャイムが鳴っても教室に戻ってこない、つまりそれだけ集中しすぎる子どももいるわけです。そうした子どもた

ちをどのようにしてこちらに向かせるかは、並大抵ではない部分があると思います。

しかし、よくよく考えてみれば、私たち研究者も何か夢中になるものがあるって研究者になったはずですよ。これは面白いと思うから夢中になってやっているわけです。私の知り合いで確か物理の先生だと思えますが、「頭の中でその問題が離れなくて、困っちゃうんだよ」という先生がいましたが、それでようやく一人前になれるかどうかの世界なのです。

ということを見ると、特別支援教育というのは、そこに道具を与えれば、つまり私たちは、目が悪くなれば眼鏡をかける、腰が痛くなれば杖をつく、耳が悪くなれば補聴器をかけると同じように何か手助けする道具というものを与えていけば、その子どもがもっている能力はどんどん育つのではないかと、ということが考えられるわけです。

また、先ほど寺崎先生もおっしゃいましたように、長田先生は「ロールプレイ」を用いて、実際に朝出会った場面で「おはようございます」と言えるように身につけさせていったことも、アイデアあふれる内容だと思えました。

論文の中で、その発達障害の子どもが職員室に入ってくるときに、「おはようございます」と言って入ってきたという文章が書かれてあり、なるほど、これであれば必ず子どもたちに言葉というものは身につくであろうということを実感しました。

昨年、一昨年ですか、日本LD学会という学習障害の学会があり、特別支援教育においてはデジタルを道具として使っていこうということが、ITと特別支援教育というシンポジウムで報告があり、多くの人たちが「道具」というものに注目し始めました。長田先生の論文は、そうした道具の使い方を示唆した非常に優れた実践であったと私どもは高く評価いたしました。長田先生には、ますます研究を深めていただければ大変ありがたいと思っています。

2点目は、中学校部門の特別賞を受賞された

埼玉県越谷市教育センターの大西久雄先生の論文です。タイトルは「ICTで学校が変わる～これからの社会に対応する力の育成～」です。これは言うは簡単ですが、非常に難しい問題なのです。正直申しますと、変えないほうが実は楽なのです。今のままでずっと行くほうが、よほど楽なのです。いろいろなことをやろうとすると、必ずと言っていいほど抵抗があります。

そうした中で大西先生は「どうやって変えるんだ」といったときに、一つはみんなが協力していくこと、みんなで協力してやってみようではないかということ、それからもう一つは、体験することでいろいろな気づきが生まれるのではないかということを書いておられました。まったくそのとおりだと思いました。

今はご存じのとおり小中の連携が盛んに行われるようになりました。小学校と中学校の先生と一緒に研修等を行ったりすることで、小学校には小学校の文化、中学校には中学校の文化があり、教え方や考え方の違いをお互いに学び合うことができるようになりました。そうすることで協力していかなければ、なかなか文化は変わらないのです。文化が変わらないから、いじめや不登校等の問題が起きるのではないかということで、研修も含めて様々な垣根を越えて変えていこうという動きが非常に盛んになってきています。

大西先生は、大学やPTAとの連携であったり、コンソーシアムを組織したりしながら、ICTを糸口とした仕組みづくりを実践されました。その成果が得られるまでには相当のご苦勞があったと思いますが、そうした勇気に敬意を表したいと思います。

今の時代、私たちにはデジタルというテクノロジーや時代の波が学校に押し寄せてきているのも現実です。そういうものに対して、私たちはどう対応するのか。そのままただ受け取るだけでは、だめなこともあります。しかしそれをどうやってうまく使っていくのか。大西先生の新しいスタイルを追求しようという意欲に感動

しました。

今回のICT部門においては、時代の波をしっかりと受け止め、それをどのようにして教育の中に生かし実践されたかが、大変わかりやすく論文にまとめられていましたことを高く評価したいと思います。

審査委員の 講評・所感

杉山吉茂先生



受賞された先生方、おめでとうございます。どの論文もとても素晴らしい内容だと思いました。

私は今でも学校によく行っていますが、現場の先生方の多くが、これは教えることになっているから教える、できるだけわかりやすく解説することがそれを教えることになる、出された問題が解けるようになればそれでいい、という考え方で授業が行われているのを目にします。

私はそのときによく、「あなたがこれを子どもに理解させて、それは子どもにとってどういう意味があるの？」と聞きます。すると、多くの先生はそれには答えられないで、「教えることになっているから教えているので、その子にとってどういう意味があるかはどうでもいい」というような反応があるのです。

しかし、今日ここにいらっしゃる教育賞を受賞された先生方の実践は、それぞれの子どもにとってしっかり意味があるように教えられています。私はよくそれぞれの教科の「魂」と言っ

ているのですが、数学であれば、数学の魂を子どもがしっかり身につけられるように教材等を展開して教えていただきたいと思っています。教育賞を受賞された先生方の論文には、教科にとって大切な本質的な考え方やそれを具体化した実践がしっかりとまとめてあり、子どもにとってそれがどういう意味をもつのかといった記述がしてあります。

ぜひこの教育賞を受賞された先生方の論文が広く広まり、それぞれの子どもにとって、それぞれの教科の魂が身につくような教育になっていただけたらと思っています。これからもぜひ頑張ってくださいと思います。

おめでとうございました。

審査委員の講評・所感



武内 清先生

受賞された先生方、このたびはおめでとうございました。私も多くの教育実践論文を読ませていただき、日本の教育や教師の水準の高さを感じることができました。今回の受賞論文を全国の先生方が読むことによって、さらに日本の教育水準が高まることを期待します。

今回、東日本大震災に関連する論文がとて多くあり、先生方の熱い思いに裏打ちされた研究実践であったと感じました。特に小学校の最優秀賞を受賞された徳水先生の論文は、その典型かと思えます。私は、先生方の熱い思いや使命感が教育を大きく動かしていくことを実感し

ました。

また、同時に教育方法に関する様々な工夫や、子どもたちの反応を見ながらその成果を確かめていくといった優れた研究も多く、その水準は極めて高いものだと思います。中学校の最優秀賞を受賞された佐藤先生の論文が、その一つの典型かと思えます。

今回選ばれた論文を見まして、私の教育社会学の立場から一つだけ言わせていただきますと、そうした先生方の熱い思いと同時に、教育においては科学性や客観性というものが大事だということです。教育においては、熱い思いがかえって結果を曇らせてしまう場合もあるかと思えます。その方法が本当にいいものなのかどうかを、ほかのものと比較したり、いろいろなデータで確かめたりして、これが一般化できるかどうかを確かめていくような客観性や科学性も教育には必要かと思えます。

指導者が熱心に取り組むと、必ず効果が上がります。しかし、その効果を上げた方法が本当に優れたものであったかどうかを、いろいろなデータで検証したりして確かめる必要もあるかと思えます。「この方法がいいと思ってやってみたが、データを取ってみたら結果的にはよくなかった」というような報告が、本当はあってもいいと思うのですが、なかなかそうしたものは出てきません。このように教育研究においては、熱い思いと同時に、反面クールに見るといった視点も大事かと思えます。

それからある意味、優れた教科書によって教育は進歩していくと思うのですが、この教科書を使って実践してみたらどうなったかという研究も、これからもっと出てきていいのではないかと思えます。

また、先ほど寺崎先生から、日本には教育実践を文章化する優れた文化があるというお話がありました。先生方にぜひお願いしたいことは、日本にはいろいろな教育学の学会がありますが、あんがい停滞しているような気がしています。例えば「日本教育学会」や、「日本教育社会学会」、

「日本子ども社会学会」というような学会がありますので、ぜひそういうところにも参加していただき、日本の学会を活性化させていただければ大変ありがたいと思います。

本当に今回はいろいろなことを学ばせていただきました。おめでとうございます。

審査委員の講評・所感



壺内 明先生

東書教育賞を受賞された先生方、おめでとうございます。新学習指導要領が全面実施されて、小学校では3年目、中学校では2年目が経過しようとしています。先生方の学校では、学習指導要領の円滑な実施・定着に向け、学校をあげて教職員の皆様が一丸となって取り組んでいることと思います。

本日受賞されました先生方は、この趣旨を十分に踏まえて、各学校で子どもたちのために多くの時間を費やして授業改善に努められ、実践研究論文としてまとめられました。先生方の論文を拝見して感じたことは、一つには、指導方法を工夫して「基礎的・基本的な知識や技能を確実に習得」させていること、二つ目には、いま最も重要とされている問題解決能力を育成するために「思考力・判断力・表現力等の育成」を言語活動や体験活動などを重視して取り組んでいることです。

私からは、中学校の部について感想を述べさせていただきます。

最優秀賞を受賞された岩手大学教育学部附属中学校の佐藤寿仁先生、おめでとうございます。先生は、「『学びの自覚化』が創り出す生徒の主体的な学習活動」というテーマで実践研究を続けて教育論文としてまとめていただきました。数学科の授業を通して「学びの自覚化」を学習過程で重要視し、生徒一人一人に主体的な学習活動を身につけさせていくという、いま最も必要とされている各教科等での「思考力・判断力・表現力」の育成を目指した適時性のある実践研究です。「学びの自覚化」を検証するために、OPPAシートを活用して一層の思考を深め、次への意欲的な学習へと発展させるとともに、学習内容を振り返り、学びを再構築するという指導を定着させていることがこの実践研究から読みとれます。さらには、獲得した考え方を振り返ることで、学びへの効力感が体得でき、次のステップである目的をもって主体的かつ発展的に取り組もうという学習意欲の向上にまで発展させたレベルの高い教育論文であります。

次に優秀賞を受賞されました千葉県南房総市教育委員会の鈴木康代先生、昨年に続いての受賞おめでとうございます。前任校での実践授業を通して、「中二理科で、説明活動の改善を図り、深く思考する生徒を育てる」というテーマでまとめられました。先生は、教育内容の改善事項の最優先課題である「言語活動の充実」を理科の四つの単元で実践されました。特に根拠を明確にして順序立てて説明するという活動は、物事を筋道立てて考えるという論理的な思考力の育成を図る上で最も重要な鍵になるものであります。指導方法の工夫として、授業過程で四つの手だてを設定したことは、言語活動を活発化する上で大変有効な教育方法であります。四つの手だてを授業で定着させて実践した結果、説明活動がより充実し、6割の生徒が論理的に考えるようになり、あとの4割は、具体物で測定するとほぼ全員が正答にたどり着くという、思考力を深めるには最も適した手だてだと確信しています。ありがとうございました。

同じく、優秀賞の佐賀大学文化教育学部附属中学校の横山千晴先生、おめでとうございます。「パフォーマンス課題とルーブリックで発信力を問う英語授業」というテーマで実践研究をされました。1年生のパフォーマンス課題である大学周辺のマップを作って紹介する単元で、単元構想や帯活動、ルーブリックを作成し、使用の実際を振り返り、その有効性や課題を追求しようとした実践研究であります。ルーブリックを生徒と一緒に作成し、不備のあるところを改善して、ルーブリック評価を行うという、英語におけるパフォーマンス課題を生徒と一体になって実践し、大きな成果をあげた素晴らしい実践研究であります。ルーブリック評価が生徒の英語における発信力を伸ばす有効な方法であることを究明した好論文であります。今後のご活躍を期待しています。

結びに、受賞された先生方のますますのご健勝とご発展を祈念して感想とさせていただきます。

本日は、誠におめでとうございます。



受賞されました先生方、おめでとうございます。私は赤堀先生とともにICTに関わる論文すべてを読ませていただきました。ICTに関する実践は、どうしても機械やソフトウェアが必要で大きなお金がかかりますので、行政で

あたり大きな民間企業等が企画をしてください、プロジェクトとして行われるものが多くあります。そうした中では、必ず報告書といったものが出されます。それらと先生方が書いてくださった論文とを比べてみますと、「東書教育賞」の意義というものがよくわかるということが、私は今年度、特に実感いたしました。

どういう点がこの賞の大きな特徴と私が感じたかと申しますと、一つは先生方個人の研究や教育委員会の取り組みであって、報道機関や民間企業が主体になって取り上げられることがないこと、これが一つ目の大きな特徴です。

二つ目の特徴は、生き生きとした教育実践の記録であることが、読んだ人の心を動かすものであるということです。教育界にいる教員はデータばかりを示されるよりは、むしろ先生方の語られた論文記述のほうが心を動かされるのではないかという気がいたします。

最近はICTの論文の中でもデータを示して、より客観的な視点を書いてくださるものも増えてきておりますので、これはもちろんいい傾向だと思っております。

いずれにいたしましても、この東書教育賞で論文集ができて、皆様方の実践が多くの方々に読まれていくことが、日本全体のICTをうまく活用した実践に大きな影響を及ぼしていきます。皆様方の実践が、国のICTを使った教育の方針にも大きな影響を及ぼすものと信じております。

東書教育賞は来年は30年ということですから、先生方がこれからまた投稿される場合には、ぜひこれまでの東書教育賞で受賞された過去の実践論文もご覧になり、その実践と自分の実践とどこが違った特徴があるのかということにも触れて書いていただくと、来年の30周年記念の論文集としてとてもいいものになるのではないかと思います。

本日は、本当におめでとうございます。

審査委員の講評・所感



三上裕三先生

このたび、東書教育賞を受賞されました先生方に心よりお祝い申し上げます。

私は、小学校部門を中心に感想を述べさせていただきます。

さて、間もなく3月11日を迎え、東日本大震災のあの日から3年を迎えようとしています。被災地では、いまだに多くの困難な課題を抱える中、学校現場においては様々な厳しい状況に直面しながらも日常の教育活動が着実に実践されつつあることに希望と期待を抱いているところであります。

本日、小学校部門で受賞されました5名のうち4名の方が被災地出身かあるいは震災後の復興教育に関わる論文であることは、第29回東書教育賞の特筆すべきことであると考えます。

最優秀賞を受賞されました宮城県石巻市立雄勝小学校の徳水博志先生は、『「震災体験の対象化」による被災児への《心のケア》の試み」と題するテーマで、被災児一人一人の心に寄り添いながら子どもの心のケアを継続され、大きな成果をあげられたものです。

壊滅的な被害を受けた石巻市の小学校においては、深い心の傷を負った児童が荒れている状況を何とか克服させたいとの強い思いから「子どもの苦悩そのものを教材化できないだろうか」と一般の常識を破るような発想から子どもの心のケアを継続的に実践されました。その過程では、このような過酷な体験を伴う実践はか

えって子どもの傷口を広げるようなことになるのではないかと絶えず悩みながらの実践でした。専門医師の指導から「心理社会的ケアワークショップ」の手法を取り入れた実践を根気強く続けるなど、先生の強い熱意と子どもが希望を抱くまで挑戦し続けようとする教師としての専門性を追及する姿勢に心より敬服いたします。

次に優秀賞を受賞されました仙台市教育委員会の小原貴之先生は、昨年度1年担任として、算数の指導においてブロック操作だけの指導から脱却できないだろうかとの課題意識から「絵画をかく活動から、数学的思考力を育てる」ことを実践を通して検証し、まとめられました。

算数の入門期である1年生の指導では、一般に半具体物であるブロックによる操作を重視します。先生は、このことを否定するものではなく、ブロック操作だけの授業では、数学的な思考力を育てることは不十分ではないかという仮説のもとに実践されたものです。つまり、学習過程において、ノートに書く活動をしっかりと位置付け、児童の思考過程がノートに残ることの大切さを実践を通して検証されています。

1年の終わりごろになると、児童が自分なりの絵や図を使って自分の考えを説明できるまで成長している姿に、ノートにかく活動を中心とした段階的な指導が成果をあげていることが伺える実践であり、従来の算数指導に一石を投じる内容であると考えます。

同じく優秀賞を受賞された福島県新地町立福田小学校の高橋尚幸先生は、「学習レポートと3つの場で作る『つながる国語科』」と題するテーマで論文をまとめられました。勤務校の学区の4割が津波にのまれた被災地で、多くの児童が仮設住宅から通学しているとのこと。

そのような状況の中で、先生が出された結論は「教師がすべきことは子どもたちに学力をつけることだ」との強い信念のもと、6年生に毎日のように学習レポートを書かせ、文章表現力を高めるだけでなく、社会科などでの資料を調べる力や算数における図や表を用いて説明する

力などを着実に伸ばす実践をまとめられました。

各教科において言語活動の充実を図ることが強調されている中で、先生の実践はどこの学校でも実践可能なもので大いに参考に資する論文であると思います。

特別賞を受賞されました愛知県碧南市立棚尾小学校の金子てる子先生は、「岩手県釜石小学校と交流を深め、共に学ぶ復興教育」のテーマで2年間にわたる被災地の学校との交流を、管理職の立場から「復興教育プログラム」を教育課程に位置づけて実践されたものです。

子どもたちが汗を流し泥だらけになりながら育てた芋や米を釜石小学校に届け、両校の交流を通して強い友情が結ばれたことは当然として、被災体験を学ぶことによって子どもたちの防災意識を高めることができたことは、「いつでもどこでも起こり得る」震災等に対する心の備えを子どもたちに育むことができたものと考えます。

来年度第30回を迎える東書教育賞において、被災地におけるその後の教育実践論文に期待するとともに、全国からの多くの応募があることを期待して感想といたします。

審査委員の講評・所感



谷川彰英先生

先生方、おめでとうございます。私はかつて授業研究をやっていたころ、ずっと思っていたことが一つありました。それは授業とは文化で

はないかということです。つまり、授業文化論というのを考えていたのです。「授業」を例えば「実践」と言い換えてもいいのですが、実践は世にいう文学や音楽、演劇などに匹敵するくらい価値のある営みなのだということを私は強調したかったのです。

今の学校現場の状況を見ると、なかなかそういう発信力のある実践がまだまだ十分ではない感じがいたします。私は今回初めて審査に携わらせていただきましたが、もし先生方の実践が文化になるとすれば、二つの条件があると思っています。

一つは何のためにその研究をしたのかということです。どうも今の学校現場を取り巻いている状況から見ると、文科省がこう言うからとか、あるいは教育委員会がこう言うからやるというような話が多いのですが、そうではなく、先生方一人一人のオリジナルな問題意識というものが反映してくるような研究を私は望みたいと思っています。今回、震災関係の実践が大変多かったわけですが、それにはそうした意味での本物の意識というものが非常に反映されていたのだと思います。

もう一つは、やはり論文は読まれないと意味がないと思っています。先ほど、武内先生からお話がありましたが、日本の教育学会が少し落ち込んでいるというのは、やはり学会の論文が文化になっていないのではないかと私は思っています。つまり誰にも読まれない、自分と審査委員だけが読む論文が多いのではないかと、それではそれは本当の文化になっていないと思うわけです。

やはり読まれてこそ読んだ人に何らかの影響を与える、心を打つものになると思います。特に学校の先生方の場合、後続の実践者の先生方に読んでいただけて、何らかの勇気を与えるような、そういうものを私は非常に強く望みたいと思っています。

これからもぜひ頑張っていただきたいと思います。本日は、おめでとうございます。